

# 串本海中公園 マリンパビリオン

2006. 3

Vol. 35, No. 2



イソモク

*Sargassum hemiphyllum*

串本周辺ではもっとも普通に見られるホンダワラの一種で、付着器が細い繊維を束ねた様な構造になるのが大きな特徴である。茎は高さ 1.5 cm ほどで直立し、2 ～ 3 年生存し、毎年その上部から 1 m 程の枝を数本生じる。枝は 3 稜形で太さは 2 mm、側枝を多数生じる。基部に生じる葉は楕円形あるいは長楕円形で左右相称、基部は鋸葉になる。上部の葉は大変に特徴があり、ちょうど木の葉を縦に半分に切った様な形（薙刀状）になり、長さは 1 ～ 1.5 cm、幅は 5 mm ほどになる。気泡は楕円形、洋なし形あるいは紡錘状で、頂端に小さな突起を持つか、短い糸状の葉を持つ。やや波あたりの弱い岩礁の潮間帯下部から水深 3 m 付近に多く生育する。分布は太平洋沿岸関東以南、日本海側の青森県以南、九州まで。朝鮮半島・中国。写真は串本町の鯖浦地先、水深 1 m の岩礁底で撮影したもの。ホンダワラ目。 S.U.

## 串本海中公園センター

## 串本のサンゴ群集 (14)

総括: 1. 種数と代表種

野村 恵一

本シリーズでは、初回にそれまでの知見から串本のサンゴ群集の特異性を述べ、第 2 ~ 11 回までは海域別のサンゴ群集の特徴を紹介し、さらに前回と前々回では全体像を把握する目的で 2003 年に実施したスノーケリング調査の結果について記した。

2004 年以降もスノーケリング調査を継続するつもりであったが、旧串本町全海域の 1/4 を消化した段階で中断してしまった。ただし、この間に串本のサンゴ群集を主体とする複数の委託調査を行う機会を得、まとまった知見を集積することができた。そこで、これまでに得られた公私にわたる調査結果を総合し、本シリーズの総括を行いたい。今回は種数と代表種について述べる。

## 資料と方法

串本産サンゴ相は基本的に串本海中公園センターに収蔵された標本を、主に西平・Veron (1995) と Veron (2000) に基づいて同定し、それを取りまとめた最新の種目録によって解析した。サンゴの分布情報は、2000 年以降に実施された、25 にも及ぶ地点 (図 1) から得られた様々な種類の調査結果本シリーズの他、野村他 (2005) から引用した。調査は基本的にライントランゼクト法 (100 m 測線 1 本) を用いて行った。なお、本文で扱うサンゴとは造礁性サンゴ類を指し、これには褐虫藻が共生しかつ堅い骨格を有する刺胞動物、すなわち、イシサン

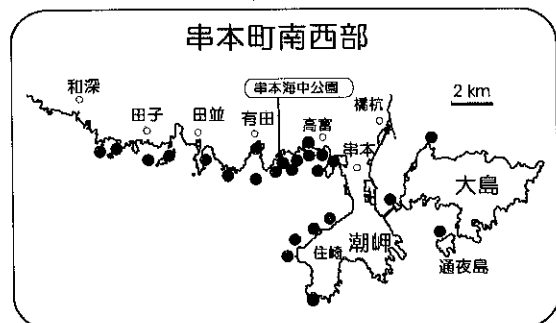


図 1. 調査地点

ゴ類、クダサンゴ類、アオサンゴ類、アナサンゴモドキ類が含まれる。

## 種数

串本からは 14 科 47 属 120 種のサンゴが確認された。サンゴは熱帯域で繁栄する大きな動物群であり、水温環境が良好な黒潮上流域ではすこぶる種が多いが、その流域下では冬季水温に分布が制限されて北上とともに漸次種数が減少していく (表 1)。そのため、サンゴの出現種数は海の暖かさの指標にもなる。串本は黒潮の影響を強く受けて温暖な環境にあり、サンゴの分布種数は伊豆の 3 倍弱、館山の 5 倍もあるが、八重山と比較すると 1/3 に過ぎない。従って、串本は館山に比べるとかなり暖かいが、八重山に比べるとかなり寒いと言える。ちなみに、国内からは 18 科 77 属 410 種のサンゴが記録されており、八重山にはその 9 割もの種が分布するが、串本は 3 割ほどである。

串本産サンゴの科別種数を見ると、最も大きな科はキクメイシ科 (30 種: 25 %) で、これに次いでミドリイシ科 (29 種: 24.2 %)、オオトゲサンゴ科 (13 種: 10.8 %)、ハマサンゴ科 (12 種: 9.2 %)、ヒラフキサンゴ科 (8 種: 6.7 %) が並ぶ (表 1)。これを他の海域と比較すると、キクメイシ科とミドリイシ科がほぼ同比率で特に優占して出現すること、オオトゲサンゴ科の比率が高いこと、ヒュサンゴ科が出現しない代わりにクダサンゴ科が出現することなどが、串本のサンゴ群集の特徴として挙げられる。ところで、各地の種数比率を比べるとおもしろ

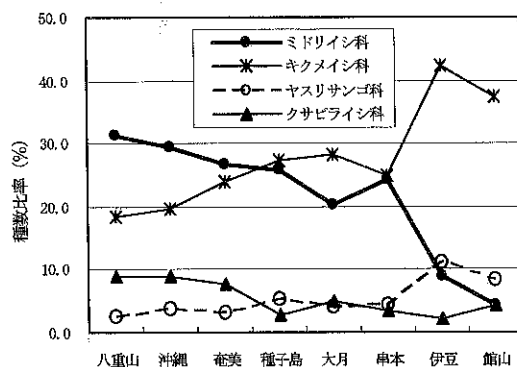


図 2. 代表的な 4 科の黒潮流域の種数比率

い現象に気づく。それは、サンゴ礁域ではミドリイシ科が最優占科となり、反対に非サンゴ礁域ではキクメイシ科がそれに置き換わり、両者は相反関係にある。そして、種子島～串本にかけての亜熱帯海域は、両者の交差域となっている（図 2）。また、クサビライシ科とヤスリサンゴ科でも類似した傾向が認められる。

### 代表種

本シリーズでこれまで述べてきたように、串本のサンゴ群集は一様に分布しているわけではなく、場所や深度によって種や被度構成が異なる。従って、串本で多いサンゴは何かと聞かれたら、「場所によって異なる」と言わざるを得ないが、全調査地点を総合した積算優占度（被度と頻度から求めた優占順位を表す指標で、最高値は 100）で出現の多寡を一般化させることができる。一般化にあたっては、積算優占度が 30 以上を多産種、10-29 までを普通種、9 未満のうちこれまで観察例が極めて少ない種を希種、それ以外を少産種とした。これにより、串本産種の多寡別の内訳は、多産種が 11 種（9.2 %：図 3）、普通種が 32 種（26.7 %）、少産種が 46 種（38.3 %）、希種が 31 種（25.8 %）と

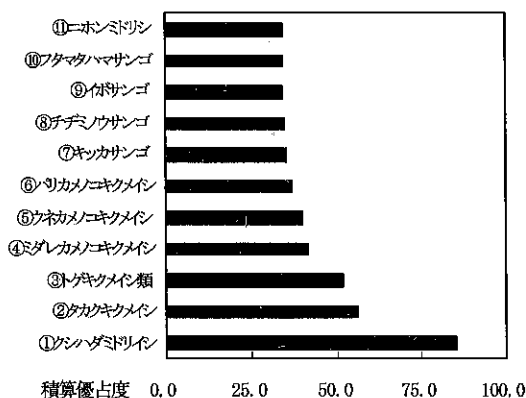


図 3. 積算優占度で見た串本の多産サンゴ

なった。図 3 を見れば分かるように、串本における最優占種はクシハダミドリイシで、本種は潮岬より西の串本浅海域に広範囲にわたって群生して美しい海中景観を形成しており、串本町のシンボルとも言える種である。また、本図に示した 11 種は串本を代表するサンゴとみなすことができる。なお、第 3 位のトゲキクメイシ類は水中での目視識別が困難なトゲキクメイシ属数種を含んでいるが、主体はフカトゲキクメイシである。

表 1. 黒潮流域各地における造礁性サンゴ類の科別の出現種数

| 綱/目/科     | 八重山<br>諸島 | 沖縄<br>諸島 | 奄美<br>諸島 | 種子<br>島 | 高知県<br>大月 | 串本  | 伊豆<br>半島 | 館山 |
|-----------|-----------|----------|----------|---------|-----------|-----|----------|----|
| 花虫綱イシサンゴ目 |           |          |          |         |           |     |          |    |
| ムカシサンゴ科   | 3         | 3        | 1        | 1       | 4         | 3   | 2        | 0  |
| ハナヤサイサンゴ科 | 8         | 8        | 6        | 3       | 3         | 2   | 0        | 0  |
| ミドリイシ科    | 114       | 100      | 59       | 39      | 25        | 29  | 4        | 1  |
| ハマサンゴ科    | 39        | 34       | 15       | 10      | 9         | 11  | 5        | 4  |
| ヤスリサンゴ科   | 9         | 13       | 7        | 8       | 5         | 5   | 5        | 2  |
| ヒラフキサンゴ科  | 26        | 24       | 17       | 13      | 10        | 8   | 2        | 2  |
| クサビライシ科   | 32        | 30       | 17       | 4       | 6         | 4   | 1        | 1  |
| ピラガラシ科    | 3         | 3        | 1        | 1       | 1         | 0   | 0        | 0  |
| ウミバラ科     | 15        | 11       | 7        | 4       | 5         | 4   | 3        | 1  |
| オオトゲサンゴ科  | 21        | 21       | 17       | 16      | 10        | 13  | 2        | 2  |
| サザナミサンゴ科  | 6         | 6        | 6        | 3       | 3         | 3   | 2        | 1  |
| キクメイシ科    | 67        | 67       | 53       | 41      | 35        | 30  | 19       | 9  |
| ヒユサンゴ科    | 1         | 1        | 0        | 1       | 1         | 0   | 0        | 0  |
| ナガラハナサンゴ科 | 8         | 6        | 5        | 2       | 2         | 2   | 0        | 1  |
| キサンゴ科     | 6         | 7        | 6        | 6       | 4         | 5   | 0        | 0  |
| 花虫綱ウミツタ目  |           |          |          |         |           |     |          |    |
| クダサンゴ科    | 1         | 1        | 1        | 0       | 0         | 1   | 0        | 0  |
| 花虫綱アオサンゴ目 |           |          |          |         |           |     |          |    |
| アオサンゴ科    | 1         | 1        | 1        | 0       | 0         | 0   | 0        | 0  |
| ヒドロ虫綱     |           |          |          |         |           |     |          |    |
| アナサンゴモドキ科 | 6         | 6        | 3        | 0       | 1         | 0   | 0        | 0  |
| 合計種数      | 366       | 342      | 222      | 152     | 124       | 120 | 45       | 24 |

「出典」 大月：野村・目崎(2005)、串本：本報告、その他：西平・Veron(1995)

## 海中展望塔に集まる魚 (29)

2005年1月～12月

福田 照雄・小寺 昌彦

2004 年 10 月に台風 23 号が海中展望塔の連絡橋を崩落させてから 2005 年 3 月の復旧まではいつも通りに塔へ行くことができなかった。このため、1, 2 月の観察を福田が塔の管理で塔に渡ったときに行い、3 月以降の観察を小寺が行った。

さて、2005 年は 118 日の観察で 124 種が記録され、前年の 142 種から 18 種減少した。月別の出現種数は、1 月の 54 種から 4 月の 41 種まで月を追って減り続けたが、5～7 月は 60 種以下で安定し、8 月から増加し始め、10 月には最高値の 86 種となり、11 月以降は減少に転じ 12 月は 69 種となった。

本年観察された 124 種のうち、前年との共通種は 104 種で、前年見られなかったものが 20 種、うち 4 種ニセゴイシウツボ、ナンヨウミドリハゼ？、ツマリテングハギ、ヒラメが塔初記録となった。また、ギンイソイワシは前回までトウゴロイワシ類として記録していたもの、ウミヒゴイ属の一種は 1998 年にヒメジ科の一種として記録していたものである。前年に比べて増加が目立った魚種はカサゴ、ホウライヒメジ、カゴカキダイ、ホシササノハベラ、キタマクラ、ハリセンボンである。ホシササノハベラは春から夏にかけて数個体が塔周辺に居着いたために、出現日数が前年の 6 日から 57 日に著しく増加した。また、前年出現し本年見られなかったものは 38 種あるが、この中にはチョウチョウウオ科 5 種、ベラ科 8 種などが含まれ、熱帯性魚類の多くが出現しない結果となった。

さて、本年の出現率が 80 % (95 日) 以上の種は 15 種で、前年の 19 種より減少した。ホウライヒメジとキタマクラの 2 種が出現率 80 % 以上となり、ノトイズミ、クマノミ、オヤビツチャ、ブチススキベラ、ヤマブキベラ、ハコブグの 6 種が 80 % 未満になった。この中で最も減少率が高かったのはブチススキベラの -32

% (85 → 53 %) である。ちなみに、本年の全出現種で最も減少率が高かったのはナガブダイで、-61 % (79 → 18 %) という著しい減少により、ほとんど見られない種となった。

2005 年は黒潮が潮岬から離れた状態で年が明け、前半は 2004 年後半からの低水温を引きずっていたが、黒潮が潮岬に接近した 9 月以降は平年以上の暖かい海となった。このため 3～4 月は過去最低に近い水温が継続し、出現種数の少ない日が続いたものと思われる。なお 3 月以降の展望塔では以前から与えていた冷凍アミのブロックや配合飼料の他に、魚を集めるためにアジ類のぶつ切りのような生餌を与え始めたために、カサゴやウツボ類の出現率が上昇する結果となった。夏以降は生餌を与える時間と観察時間がずれたために、ウツボ類の出現率は以前の状態に戻ったが、カサゴはそのまま常に観察される種のひとつとして記録された。カサゴの出現率は 1990・1991 年に次いで 3 番目だが、この 2 年は冬季の水温が低く (1～3 月の平均水温が 16.1 °C)、本年も同じように冬季の水温が 15.6 °C と低かったことから、生餌を与えたことだけがカサゴの高出現の要因とは決められないところもある。

本年は過去最多の 158 種が記録された 2003 年から 2 年連続して大きく減少する結果となった。しかし、2006 年は冬季にも黒潮が接岸傾向で潮岬の南 15 マイル程を通っており、展望塔周辺も比較的暖かな水温が続いているので、多くの魚種が出現することが期待される。

| 和 名       | JFMAMJJASOND 日数  |
|-----------|------------------|
| ニセゴイシウツボ* | -----1----- 1    |
| ウツボ       | --1122211-11 23  |
| ワカウツボ     | -1-111-1111 16   |
| トラウツボ     | -----11----- 2   |
| カタクチイワシ   | -----12-1----- 6 |
| キビナゴ      | 21111-2215 21    |
| ニシン科の一種   | -----1----- 1    |
| ゴンズイ      | ---1---12--- 4   |
| アカエソ      | -----111111- 9   |
| ボラ        | 22-123222332 75  |
| ムギイワシ     | 432354543345 83  |
| ギンイソイワシ** | --2321355552 58  |
| オキザヨリ     | -----21- 6       |

| 和 名          | JFMAMJJASOND | 日数  |
|--------------|--------------|-----|
| ヘラヤガラ        | 1-----1      | 2   |
| アオヤガラ        | -----1121    | 10  |
| カサゴ          | 122222222222 | 94  |
| ハナミノカサゴ      | -----11      | 2   |
| オオスジイシモチ     | 211112222222 | 77  |
| クロホシイシモチ     | -1--2--22221 | 31  |
| カスミアジ        | -----1       | 1   |
| ギンガメアジ       | 11-----221   | 12  |
| マルアジ         | -----1       | 1   |
| シマアジ         | ---12321---  | 29  |
| マアジ          | 31-----      | 8   |
| フエダイ         | 1---11111-   | 6   |
| クロサギ         | ---1-1111-   | 19  |
| クロダイ         | -1---1---    | 2   |
| クロダイ         | ---11---     | 2   |
| ハマフエフキ       | -----1       | 1   |
| アカヒメジ        | -----3-1     | 7   |
| ホウライヒメジ      | 222223221222 | 98  |
| オジサン         | 1-----22211  | 30  |
| オキナヒメジ       | ---1211---   | 12  |
| ウミヒゴイ属の一種**  | -----1       | 1   |
| トゲチヨウチヨウウオ   | 22-----223   | 37  |
| チヨウチヨウウオ     | 222333444333 | 114 |
| スミツキトノサマダイ   | -----1       | 1   |
| トノサマダイ       | -----221-    | 14  |
| ヤリカタギ        | -----211-    | 11  |
| フウライチヨウチヨウウオ | -----12      | 12  |
| ノトイズミ        | 332222122233 | 76  |
| テンジクイサキ      | 222111122222 | 64  |
| ミナミイズミ       | -1121-122    | 24  |
| イズミ          | ---111-1121  | 15  |
| クロメジナ        | 334555555555 | 117 |
| オキナメジナ       | 221-22111122 | 46  |
| メジナ          | 555555555555 | 118 |
| タカベ          | ---11---     | 2   |
| カゴカキダイ       | 111134443332 | 84  |
| イシダイ         | -----1       | 3   |
| イシガキダイ       | -----1-      | 1   |
| ミギマキ         | -----1       | 4   |
| タカノハダイ       | 222233223333 | 111 |
| クミノミ         | 322-22223333 | 94  |
| アマミスズメダイ     | 1---111-1111 | 20  |
| テンジクスズメダイ    | 1---22-1221  | 42  |
| ロクセンスズメダイ    | -----122     | 15  |
| オヤビツチャ       | 222212222344 | 86  |
| メガネスズメダイ     | -----222     | 24  |
| ソラスズメダイ      | 544455555555 | 118 |
| ナガサクスズメダイ    | ---21221221  | 59  |
| セダカスズメダイ     | 323323332333 | 116 |
| コブダイ         | 1-----1-     | 2   |
| ブチススキベラ      | 221222111112 | 63  |
| カマスベラ        | 1-----       | 1   |
| カンムリベラ       | -----2222    | 22  |
| クギベラ         | -----12221   | 29  |
| ムナテンベラ       | -----11121-  | 17  |
| ホンベラ         | -11---1112   | 18  |
| ホンソメワケベラ     | 221-22323333 | 96  |
| アカササノハベラ     | 323334444444 | 117 |
| ホシササノハベラ     | -1123322111  | 57  |
| カミナリベラ       | 222223334443 | 99  |

| 和 名         | JFMAMJJASOND  | 日数  |
|-------------|---------------|-----|
| コガシラベラ      | 2---12122334  | 63  |
| ニシキベラ       | 333333333344  | 117 |
| セナスジベラ      | -----121-     | 8   |
| ヤンセンニシキベラ   | -----1222     | 23  |
| オトメベラ       | 322233344444  | 115 |
| ヤマブキベラ      | 322122222222  | 89  |
| ハコベラ        | -----1-       | 1   |
| ヒブダイ        | 21---211-222- | 34  |
| ダイダイブダイ?    | 1-----        | 3   |
| アオブダイ       | 111-1112322-  | 41  |
| ニシキブダイ      | -----1-       | 3   |
| ナガブダイ       | 121-----1112  | 21  |
| アオブダイ類 (幼魚) | -----1        | 1   |
| ブダイ         | 333332223333  | 115 |
| ワヌケトラギス     | -----1-       | 1   |
| ヘビギンポ       | ---11111111-  | 13  |
| ゴマフヘビギンポ    | ---122112-11  | 29  |
| ミノカエルウオの一種  | -----111      | 5   |
| カモハラギンポ     | 11---11---    | 4   |
| ニジギンポ       | -1-----       | 3   |
| ミナミギンポ      | 1-----1-      | 4   |
| テンクロスジギンポ   | 1---11222111  | 32  |
| ナンヨウミドリハゼ?* | -----1        | 2   |
| クツワハゼ       | ---1---211-   | 9   |
| アカハチハゼ      | -----21-      | 8   |
| クロユリハゼ      | -----111-     | 4   |
| アイゴ         | 11-22222232   | 61  |
| ツノダシ        | 1-----12222   | 30  |
| ヒメテングハギ     | -----1        | 1   |
| ツマリテングハギ*   | -----11       | 5   |
| テングハギ       | -1---11221    | 26  |
| ニザダイ        | 322322333333  | 116 |
| ニセカンランハギ    | 221122223222  | 85  |
| ニジハギ        | -----1-       | 1   |
| ナガニザ        | -----22222    | 42  |
| モンツキハギ      | -----21-      | 11  |
| シマハギ        | -----1        | 1   |
| サザナミハギ      | -----1-1-     | 3   |
| アカカマス       | -2-----       | 3   |
| ヒラメ*        | -----1-       | 1   |
| カワハギ        | 1---1111-121  | 15  |
| ウミスズメ       | -1-11---111   | 11  |
| シマウミスズメ     | 211112112122  | 51  |
| ミナミハコフグ     | -----1        | 2   |
| ハコフグ        | 112122222222  | 85  |
| クサフグ        | -1-1-----     | 2   |
| シッポウフグ      | 1-----        | 1   |
| ハナキンチャクフグ   | -1-----       | 1   |
| キタマクラ       | 222223233333  | 115 |
| イシガキフグ      | ---12122221   | 41  |
| ハリセンボン      | 221111122332  | 72  |

\*は塔での初記録種

\*\*はこれまで出現したものの名前を変えたもの

表中の数字は月の出現度

(1:少ない, 2, 3:普通, 4, 5:多い)

| 月    | J  | F  | M  | A  | M  | J  | J  | A  | S  | O  | N  | D  | 計   |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 観察日数 | 8  | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 118 |
| 出現種数 | 54 | 45 | 42 | 41 | 58 | 58 | 56 | 65 | 77 | 86 | 82 | 69 | 124 |

## POLYCHAETOLOGICA (40)

## 各科の属の検索と種の説明 (25)

チロリ科 No. 5

内田 紘臣

今回はチロリ科の第 1 属 *Glycera* のグループ 3 の種の検索表までで終わった。今回はこのグループ 3 に属する種の紹介を始める。

*Glycera americana* Leidy, 1855

(マイヅルチロリ 飯塚, 1947)

模式産地はアメリカ、ロードアイランド。比較的大型で、潮間帯を含めた浅海に生息し、非常に特異的なエラをもつことも相まって、一般によく認識され、国外の産地では各地でかなり異なった種名で記録されている。種名は当然、産地アメリカによる。本種はアメリカ大陸東海岸では合衆国北部（模式産地）からマジェラン海峡、同西海岸ではカナダのブリティッシュコロンビアからペルーまで。その他わが国とオーストラリア・ニュージーランドに分布し、潮間帯～水深 310 m から記録がある。

わが国の初記録は南日本の多毛類を報告した Marenzeller (1879) (本シリーズ No. 22, Vol. 31: 44 参照) で、*Glycera opisthobranchiata* という新種として記載された。この新種の模式産地は横浜以南の南日本のどこかで、正確な産地は不明である (Vol. 32: 37 参照)。原記載で Marenzeller は分岐したエラが疣足の後面についていることを強調している。なぜなら本属の多くの種は疣足の前面にエラをもつからである。種名は「後にエラをもつもの」の意である。つづいて Izuka (1912) は同じようなエラをもった標本を茨城・神奈川・広島から採集し、*G. opisthobranchiata* として報告した。

Izuka (1912) は上記の種の記載のすぐ後（同種の中に *G. tessellata* の記載が入る）に、神奈川県三浦三崎から採集された全長 280 mm, 328 体節の標本を *G. misakiensis* として新種記載した。前種は比較的小さなエラが疣足後面にあるのに対し、本種は疣足背稜に多分岐した大きなエラをもっている。本種の口吻突起はずんぐり

して短く、リングもツバももたない。

飯塚はこの両種を 1927 年発行の北隆館「日本動物図鑑」に掲載し、第 1 種は学名のカタカナ表示とし、第 2 種にはミサキチロリという和名を与えた。

奥田・石川 (1936) はわが国の釣り餌に利用される多毛類を概説し、第 1 種が岡山・広島・有明海に産することを報じ、本種に広島で用いられている地方名から、ペロダシという新称和名を提唱した。さらに Okuda (1939) は東北の女川から第 1 種を報告した際に、同所で第 2 種の個体を発見し、第 2 種が第 1 種と同種である可能性を記している。

北隆館の動物図鑑は 1947 年に増補改訂版が出版された。チロリ科を執筆しているのは飯塚であるが、彼はここで、第 1 種にマイヅルチロリという和名を与えた。そして、初版にあった第 2 種を削除している。恐らく Okuda (1939) の指摘により、第 2 種を第 1 種と同種と認めたのではないだろうか。さらに Imajima & Hartman (1964) は Marenzeller が南日本から新種として報告したこの種が、アメリカ大陸東西両海岸に産する上記の種と同種とした。

本種の和名で最初のものはミサキチロリであり、その次はペロダシである。しかし、マイヅルチロリは本種に与えられた和名として既に 50 年以上も経過するので、このままこれを使用するのが良いものと思われる。

筆者の手元には石川県能登島・横須賀市荒崎・三重県五ヶ所湾・和歌山県浦神湾・岡山県牛窓・広島県三原・向島からの 10 個体の標本がある。

西村図鑑にカラー図版が掲載されている。

*Glycera gigantea* sensu Okuda, 1938

奥田 (1938) が体後部の欠損した体長 180 mm の 1 個体の標本を伊勢湾から上記の学名で記録した。*G. gigantea* Quatrefages, 1865 はフランス北部ブルターニュを模式産地とする、300～400 体節をもち、全長 350 mm に達する巨大な種である。さらに、口吻の長突起は随分背が低い。ま

たこの種は固定標本では鰓が翻出していないことがあるのが特徴といわれる。

千葉県から八重山に亘り、内湾性の砂泥底から多くの標本が得られている種がある。この種は疣足後足葉の腹足葉の先は丸いが、同背足葉はやや尖り気味で、この点で *G. gigantea* と異なる。しかし生時の観察では、鰓を出すことが少なく、容易にエラをもたない種と認識しがちなことは、*G. gigantea* や奥田の伊勢湾からの標本、さらには Fauvel (1932) がインド洋から記録したものにもよく似る。奥田 (1938) には疣足の図がないので、正確には判断しかねるが、それ以後、わが国から 250 mm を越えるような *G. gigantea* に似た巨大なチロリの記録がないところを見ると、奥田 (1938) の *G. gigantea* は、筆者の手元に多くの標本があり、*G. gigantea* ほど大きくはならない、この種である可能性が高いと思われる。

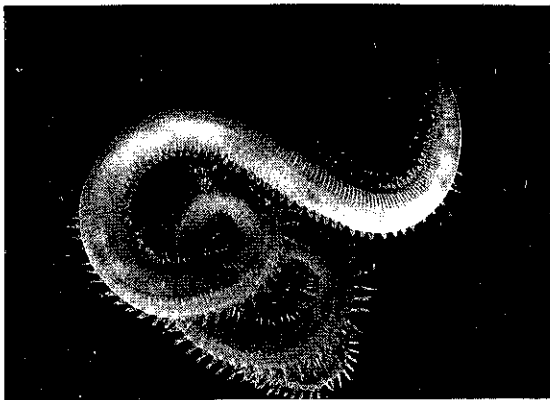


図. 串本町橋杭潮間帯の *G. gigantea* sensu Okuda, 生時の写真

#### *Glycera* sp. RYUK.

(?= *G. siphonostoma* sensu McIntosh, 1905)

前種に似るが、後足葉は前足葉よりはるかに短く、また後足葉の背腹両足葉とも先がよく尖る。慶良間諸島潮間帯からの 1 個体と、同諸島水深 10 m からの 1 個体の、合計 2 個体の標本がある。

チャレンジャー探検の多毛類の著者として有名なイギリスの McIntosh (1905) は「日本産のチロリ科について」という短い報告を書き、そ

の中で *G. siphonostoma* (delle Chiaje, 1825) を報告している。この標本は 1874 年にわが国の Tukuran の低潮帯で、St. John 船長が採集した体長 6~7 インチの 1 個体である。同一の報告の中で、McIntosh は *G. alba* を日本海沿岸 30 尋から報告すると共に、チロリ科の別属の 1 種を *Hemipodus simplex* Grube, var. という名で記録している。この種の採集データは上記の種と同じく、St. John 船長が日本の Koba (北緯 34° 27', 東経 156° 50' : ここは房総はるか沖合の太平洋で、この数値は明らかにミスである) で 1874 年に入手したものとある。1874 年といえばチャレンジャー探検の最中であるが、残念ながらチャレンジャー号がわが国に寄港し、わが国の周辺で採集したのは翌 1875 年であるし、チャレンジャー号の船長は St. John ではない。Koba は神戸を指す可能性があり、Tukuran は吐噶喇(トカラ)を指すものと思われる。

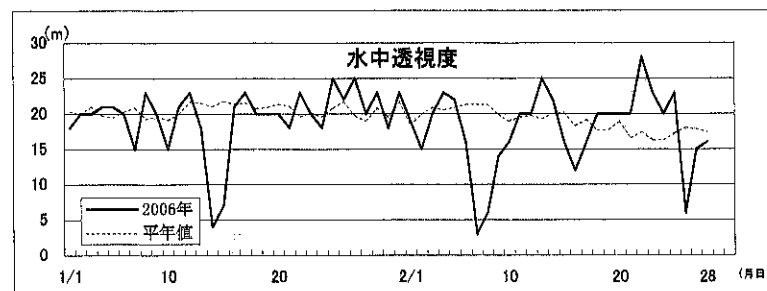
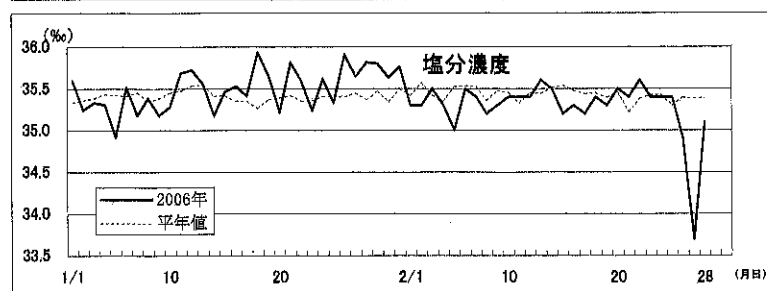
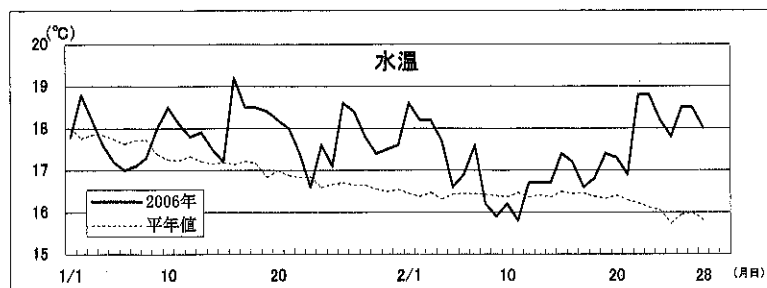
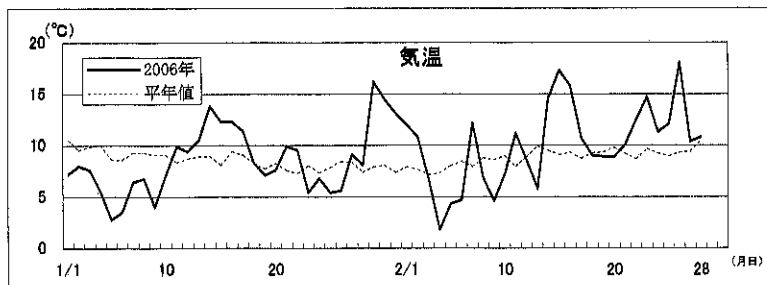
さて *G. siphonostoma* (delle Chiaje, 1825) はナポリから *Lumbricus siphonostoma* として記載されたが、時代も古く、かつ delle Chiaje (1822-1831) はナポリ産の全無脊椎動物を扱ったもので、本種の記載は非常に簡単なものであった。種名は「管状の口」の意である。それ以後、Claparède (1868) がナポリ産の本種を詳しく記載したが、後年 Claparède の記載した種はすぐ前に出てきた *G. gigantea* Quatrefages, 1865 であることが判明している。そこで、記載不完全な delle Chiaje (1825) の記載した *G. siphonostoma* が、よくわかっている *G. gigantea* Quatrefages, 1865 と同種の可能性が高い。両方を同種として、より古い名である *G. siphonostoma* (delle Chiaje, 1825) を使うか、それとも *G. siphonostoma* を不確定種とし、*G. gigantea* Quatrefages, 1865 を使うかで、意見の分かれるところである。

トカラ列島らしきところの潮間帯で採集された *G. siphonostoma* であるが、上記の諸々の事情を考えれば表記の種である可能性がある。

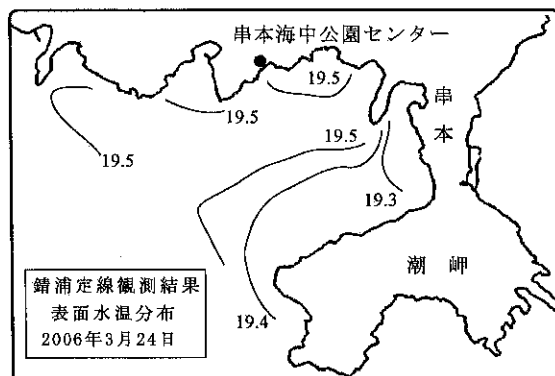
背面から見た疣足とエラが前回の検索表の 2, 左図 (Vol. 35: p. 5) である。

鯖浦の海から  
森 美枝

|     |    |         |         |           |            |
|-----|----|---------|---------|-----------|------------|
| 平均値 | 1月 | 気温 8.6℃ | 水温17.8℃ | 塩分濃度35.5‰ | 水中透視度19.5m |
|     | 2月 | 気温10.1℃ | 水温17.4℃ | 塩分濃度35.3‰ | 水中透視度17.7m |



12月の大寒波で、この冬は辛く長い冬になりそうだと覚悟した。しかし、いざ蓋を開けてみたら1月は平年並み、2月は平年よりも暖かい日が多く、特に2月後半は3月中旬並の暖かさだった。この暖かさで桜のつぼみも一気にゆるんだのか、気象庁が発表した潮岬の開花予想は、平年よりも10日早い3月18日だった。桜と言えば海の桜も今が旬である。海の桜とは、『桜鯛』、魚の王様マダイのことである。この時期のマダイは脂がのって最も美味しいと言われ、また体が美しい桜色を帯びるため、『桜鯛』と呼ばれて珍重されるのである。脂がのっているのは、産卵前で栄養を蓄えているため、美しい桜色は婚姻色のためと言われている。ところで海には桜鯛と呼ばれる魚がもう一種いる。こちらは、『サクラダイ』で学名にも *Sacra* がつく正真正銘のサクラダイである。赤い絨毯に桜の花びらを散らしたような美しい模様の魚だが、この派手な色彩は雄だけのものである。人間の世界でも最近はいきれいな男性がブームだが、個人的には「桜を背負った金さん」のような潔い男性が増えてほしい。



マリンパビリオン Vol.35, No.2 通巻386号

年6回発行 一部100円  
(年間購読料1,000円/送料含む)  
発行日 平成18年3月31日

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県東牟婁郡串本町有田1157  
(株) 串本海中公園センター  
電話 & FAX 0735-62-4875  
ホームページ <http://www.kushimoto.co.jp/>  
印刷所 坂本印刷